

# GPAI 東京イノベーションワークショップの開催結果

2025 年 7 月 28 日改訂

2025 年 5 月 28 日～29 日、GPAI 東京イノベーションワークショップが、東京日本橋タワーにおいて、GPAI 東京専門家支援センター主導の下で、モンリオール・パリの 2 センターとの共催、総務省・JICA の後援を得る形で開催された。

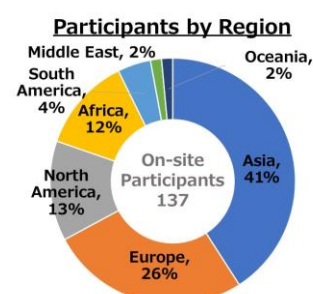
同会合には、GPAI 及び OECD の専門家、政府機関、国際機関、学界、民間、非営利団体、OECD 及び 3 センターの幅広い関係者が集結し、GPAI 非加盟国を含む 41 か国 170 名以上が参加した（現地参加は 36 か国 137 名）。

## 1. 会合概略

### （１）参加者情報

参加者の居住地域について、アジア（41%）、欧州（26%）、北米（13%）、アフリカ（12%）の順に多かった。

所属については、政府機関（44%）が最も多いが、学界、国際機関、民間企業、非営利団体からもバランスよく参加した。



### （２）プログラム

#### ① 開会式（28 日）

原山優子 GPAI 東京センター長の開会宣言の後、徳田英幸理事長の主催者挨拶、今川拓郎総務審議官の来賓挨拶等が行われた。その後、北野宏明氏（ソニーグループ チーフテクノロジーフェロー）による基調講演と 4 テーマのモデレーターによるパネルディスカッションが続いた。



#### ② グループ・ディスカッション（28 日）

「グローバルサウスにおける AI 利活用と国内外の AI エコシステムの強化」、「国際的な AI ガバナンスフレームワークの相互運用性」、「多言語・多文化対応 AI」、「オープンソース AI」の 4 テーマを 12 のグループに分けて意見交換。その後、グループごとに中間報告を行った。



#### ③ レセプション（28 日）

日本政府を代表して、阿達雅志総務副大臣が来賓挨拶。また、日本の AI 関連民間企業として AWS、富士通、角川アスキー総研、KDDI、コニカミルタ、マイクロソフト、TOPPAN デジタルによる展示とプレゼンテーションが行われた。



#### ④ テーマ別のディスカッション（29 日）

テーマごとにディスカッションを行い意見を集約し、すべての参加者が終結し、テーマ別の最終報告が実施された。



#### ⑤ ラップアップ及び閉会式（29 日）

「GPAI の将来」をタイトルとし、ウロス・ポルガ GPAI 共同議長、カリーン・ペルセ OECD 課長、アルビナ・オブチアレニコ欧州評議会課長、リディア・ラミシ・アカンバリバ・ガーナ国務大臣（APNIG: アフリカ議会インターネットガバナンス・ネットワーク委員）によるパネルディスカッションが実施された。



その後、3 センターの代表より、グループディスカッションの結果が報告された。さらに、3 センター長にカリーン・ペルセ OECD 課長を加えて、ワークショップ全体の議論の総括が行われた。最後に、徳田英幸理事長からの閉会挨拶により締めくくられた。



### （3）グループディスカッションにおける議論の結果のポイント

グループディスカッションにおける議論の結果は、次のとおり。この内容は、本年 6 月 10 - 11 日に開催された GPAI Plenary で報告された。今後、GPAI の活動や政策提言に反映される見通しである。特に、国際的な協力体制の強化と、持続可能な AI エコシステムの構築に向けた取組が期待される。

#### ① 「グローバルサウスにおける AI 利活用と国内外の AI エコシステムの強化」グループ

本プロジェクトでは、「インパクトのための AI リビングラボ（社会にインパクトをもたらす AI の実証実験ラボ）」の設置が提唱された。

AI 技術の発展が先進国を中心進められている結果として、AI の利用を巡る不平等は拡大していることから、グローバルサウス諸国に AI エコシステムの強化が必要との議論がなされた。その結果として、導き出されたのが「AI リビングラボ」の設置である。リビングラボでは、データ、ユースケース、観測手法などの優良な実践例が収集・共有され、すべてのステークホルダーが参加して学ぶことが可能となると期待される。

#### ② 「国際的な AI ガバナンスフレームワークの相互運用性」グループ

議論の結果、「AI ガバナンスフレームワークの詳細マッピング」の策定、及び「AI イノベーションのためのデータおよびインプット／アウトプットの活用を促進する政策枠組間の相互運用性の構築」が提唱された。

前者については、AI ガバナンスに関し、OECD の原則や米国 NIST の AI リスクマネジメント・フレームワーク（RMF）、ISO/IEC の規格、EU の行動規範（Codes of Practice）、広島 AI プロセスなどのハイレベルのフレームワークに基づき、数多くの作業マップが策定されてきた一方、現場の実務者は、多数のフレームワークの共通点・相違点は何か、フレームワーク間の衝突回避には何をすべきか、といった点に苦慮しているといった背景から、国内及び国際的な AI 政策のフレームワークを調整するため、既存のフレームワークに含まれる詳細の活動項目や措置を横断的にマッピングすることが提案された。具体的には、オントロジー（情報の意味を定義する概念や仕組み）ベースの比較や可視化を行うとともに、中小企業、民間部門、政策立案者等からの知見を集約することを提唱した。

本プロジェクトの成果物としては、単なるマッピングにとどまらず、ユーザーが実際にどのように枠組を活用できるかを検証する机上研修や、政策コンサルテーション、キャパシティ・ビルディングといった活動とも連携することが提案された。

後者については、AI の発展に不可欠なデータ活用を推進するため、国際的な政策枠組の相互運用性を高めることが目的とされた。

また、国境を越えたデータ共有を円滑にし、AI モデルのローカライズを支援する仕組みについても提唱された。

その一環として、自主的な技術標準、ガバナンスツール、契約条件の策定が提案され、国際サンドボックスでの実証を通じた実用性の検証が想定されている。

### ③「多言語・多文化対応 AI」グループ

議論の結果、「多文化 AI コンソーシアム」の設置が提唱された。

LLM に代表される現代の主流な AI システムは、より大量のデータが取得可能な言語に存しており、世界の多様な文化や価値観を十分に反映できていないという課題がある。これは文化的表現の排除や差別にもつながりかねないことを意味する。

本プロジェクトでは、文化的多様性を AI に組み込むためのフレームワークとして、その創設を提案された「多文化 AI コンソーシアム」においては、国連の「消滅危機言語」リストを活用し、過小評価されている言語向けのデータセットを整備するほか、文化的安全性を評価するベンチマークやインデックスの開発を目指すことを提唱した。

本プロジェクトのパートナーとしては、国際機関、政府、大学、研究機関だけでなく、地域コミュニティ、文化専門家、伝統知識の継承者も含まれる。AI が文化的尊厳を守り、多様性を尊重する形で開発されていくよう、包括的かつ協調的な取組が求められる。

### ④「オープンソース AI」グループ

本プロジェクトでは、「オープンソース AI ツールのアクセス性の向上」と題する発表を行った。

オープンソース AI は、透明性・共同性・革新性の観点から注目を集めているものの、安全性や責任ある利用を担保するためのフレームワークやツールは、未だ整備の途上にある。この課題に対し、まずは既存のガバナンスツールのギャップ分析を行い、その結果をもとに AI ライフサイクル全体をカバーするタクソノミー（分類体系）を構築する方針が確認された。

その後、パブリックコンサルテーションやハッカソン、スキル育成を通じ、実際に使える仕組を整えていくことが計画されている。その関係者としては、ハイパースケーラー（大規模データセンター・AI 企業）を含むオープンソースの主要企業、標準化団体、アライアンス、大学、政府、NGO などの多様なプレイヤーが想定される。

## 2. アンケート結果

### （１） 回答状況

全体で 76 名からの回答が得られ、オンサイト参加者に占める割合は 55%であった。テーマ別には、「グローバルサウス」と「相互運用性」の回答数が多く、回答率では「グローバルサウス」のグループが 65%と、他を上回った。

| テーマ名             | 総数 | 回答 | 回答率 |
|------------------|----|----|-----|
| Global South     | 44 | 26 | 65% |
| Interoperability | 42 | 26 | 62% |
| Multilingual     | 28 | 16 | 57% |
| Open Source      | 18 | 8  | 44% |

## (2) 基本情報

### ① テーマの適切性・満足度 (What)

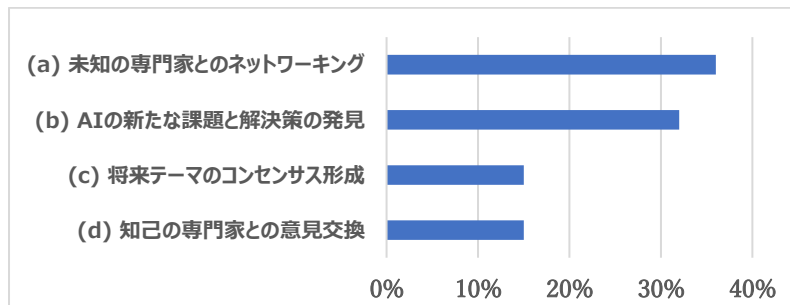
4つのテーマについて、数(86%)・内容(72%)ともに適当であった。他に挙げた方が良かったテーマの記述を求めたところ、20の提案があった。そのほとんどは、これまで専門家支援センターのプロジェクト(責任あるAI、データガバナンス、仕事の未来、安全性など、GPAI1.0体制下のプロジェクトを指す。)で取り組んできたものであったが、それ以外のものとしては、「ディープフェイクのリスクと失業」、「AIと民主主義」、「グローバルサウス」のより多面的な分析(データ、インフラストラクチャー、タレント)」などが挙げられる。

### ② グループディスカッションの進め方・まとめ方の適切性・満足度 (How)

グループディスカッションについて、進め方(「満足」・「概ね満足」合計92%)・まとめ方(「満足」・「やや満足」合計91%)ともに満足度は高かった。不満足の回答者の意見として、「ディスカッションの時間不足」、「ディスカッション材料の事前提供が不十分」という回答が複数見られた。

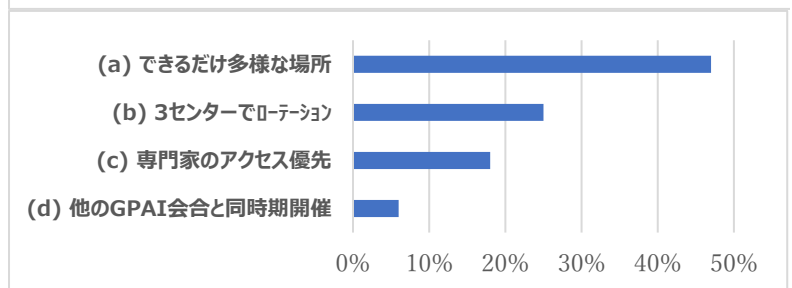
### ③ 参加した意義・成果 (Why)

「未知の専門家とのネットワーキング」(36%)と「AIの新たな課題と解決策の発見」(32%)の2つが多くを占めた。



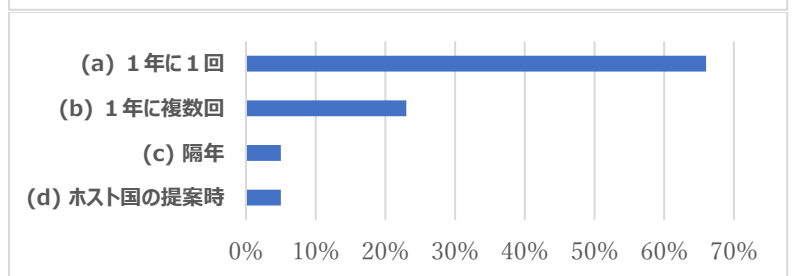
### ④ 将来会合の開催場所 (Where)

「できるだけ多様な場所」(47%)が約半数を占めた。次いで、「3センターでローテーション」(25%)が多かった。



### ⑤ 開催頻度・期間 (When)

開催頻度は「1年1回」(66%)という回答が全体の7割近くを占めた。開催期間は「2日間が適当」(71%)とする回答が多かった。



## (3) 参加者からの意見

アンケートにおいて、グループディスカッションより得た示唆に対する自由記述を求めた。以下は、その抜粋である。

### ① 「グローバルサウスにおけるAI利活用と国内外のAIエコシステムの強化」グループ

- ・ 今回のワークショップでは、さまざまな専門家から多様な視点を学ぶ貴重な機会となった。
- ・ 所属するサブグループ(グローバル・サウス4)では、活発で敬意のある議論が行われ、参加者同士が互いの所与としていた考え方に自由に異議を唱えることができる、良い雰囲気があった。決して「楽な」議論ではなかったが、だからこそ生産的で有意義な時間だったと感じている。この議論を通じて、グローバルサウスにおけるデータ、人材、計算資源に関する独自の、あるいは深刻化した課題について、具体的な理解を深める

ことができた。

- ・ 「グローバルサウス（あるいはグローバル・マジョリティ）」はあまりにも多様であり、単一のプロジェクトで包括することは難しいという点も印象的であった。一部の参加者は、OECD の資金政策に整合するかどうかに重きを置いており、提案されたプロジェクトが実際にインパクトを持ち、現実のニーズに込えているかという点よりも優先しているように見えた。
- ・ AI の学習データからマイノリティや周縁化された声が構造的に排除されているという問題については、これまでも知識としては理解していたが、他の人々の実体験を聞くことで、その影響がより現実的で切実なものとして感じられた。このワークショップを通じて、AI の開発において文化的・認識論的多様性をどう確保するか、そしてより公平で包摂的なシステムをどのように構築していけるかについて、改めて深く考える責任を感じた。

## ②「国際的な AI ガバナンスフレームワークの相互運用性」グループ

- ・ グループディスカッションを通じて、AI ガバナンスの枠組みに関する課題と機会についての理解を深める、いくつかの重要な洞察を得ることができた。最も価値のある気づきの一つは、世界中に多くの AI ガバナンスの枠組が存在しているにもかかわらず、構造や基本原則の両面において相互運用性が著しく欠けているという点でした。
- ・ 大企業が AI ガバナンスの方向性を決めてしまわないようにすること、そして企業が単に規制が緩い、あるいは明確な地域にだけ進出するようなことを防ぐことの重要性も認識された。
- ・ このディスカッションは非常に実りあるものであり、相互運用性のレベル（原則、標準、規制の枠組）や、明確で透明性のある用語の重要性について、いくつかの重要な検討がなされた。
- ・ 既存のプロジェクトにもっと焦点を当て、それらをできる限り前進させること、そして可能な限り多くの国や国際機関からの関与（資金提供も含む）を得ることが望ましいかもしれない。

## ③「多言語・多文化対応 AI」グループ

- ・ グループディスカッションを通じて、文化的・多言語データの収集とベンチマークの重要性について多くのことを学ぶことができた。
- ・ 一部の参加者からは、生成 AI ツールの使用におけるリスク（少数言語や文化の過小評価）を緩和する必要性について、強い危機感が示された。
- ・ 世界中でどのような言語技術がすでに開発されているのかについて新たな視点を得ることができ、多くの技術がディスカッションの中で紹介されていたことも印象的であった。
- ・ NICT（情報通信研究機構）の自然言語処理（NLP）に関する取り組みについても、より深く知ることができた。

## ④「オープンソース AI」グループ

- ・ ツール面でのオープンソース AI の課題（安全性の取り扱いやコンプライアンスなど）について議論があった。
- ・ AI におけるオープンソースの側面、OECD がまとめている既存の AI ツールのカタログ、そして各国がオープンソースに対して持つ異なる優先事項についても触れられた。
- ・ 専門家からより深い洞察を得るための、継続的かつ詳細な議論の必要性が強調された。
- ・ 特にインドにおける現状と課題を通じて、オープンソースとその現在の課題について多くを学ぶことができた。

### 3. その他の参考情報

#### (1) 会合結果の公式報告

6月10-11日に開催されたGPAI プレナリーにて、原山優子センター長より会合結果を報告した。また、OECD.AIに関連情報が掲載(\*)されている。

(\*)<https://oecd.ai/en/work/advancing-human-centric-ai-highlights-from-the-2025-gpai-associated-innovation-workshop-in-tokyo>

#### (2) GPAI 東京イノベーションワークショップのホームページ

本報告書のほか、GPAI プレナリーへの提出資料と公式アルバム集（“Tokyo Visual Timeline”）が掲載されている。なお、その他に GPAI 東京イノベーションワークショップの参加者向けのページでは、より詳細の情報が掲載されている。

(以上)